

## はじめに



釧路湿原自然再生協議会  
再生普及小委員会  
環境教育ワーキンググループ

座長 高橋 忠一

釧路湿原を主な対象とする環境教育ガイドブックをお届けいたします。ここには釧路管内の小学校と中学校で実際に総合的な学習の時間を使って行われている釧路湿原をフィールドとする環境教育の実践事例とその実践を支援しているさまざまな協力施設の具体的な学校との連携の事例が収められています。

このガイドブックは次のような経緯で生まれました。

以前、教育関係の方々を中心として構成されていた環境教育ワーキンググループは、小学校・中学校を対象とした「大好き釧路湿原」、小学校高学年を対象とした「調べよう釧路湿原」、中学校を対象とした「考えよう釧路湿原」の3冊の釧路湿原環境教育資料とその活動を支援するための「人材バンクプログラムリスト」を作成して平成18年に解散することになりました。

そこで再生普及小委員会では新たに地域のさまざまな方をメンバーに、学校教育にとどまらず、より多様な市民の方々に釧路湿原に対する認識と感性を伝え続けることを目的に新しく環境教育ワーキンググループを立ち上げることにしました。

再スタートを切ったこのワーキンググループはまず学校教育の中で釧路湿原をテーマとする体験的な学習や調べ学習がどのように行われているかの調査を行いました。その調査の結果はこのガイドブックの資料編に要約を載せてありますが、そこではかなり多くの学校が釧路湿原を何らかの学習に取り込んでいることが分かったのと同時に、実際に児童を湿原に誘うことや、学習を行うためにはさまざまな困難もあることが分かりました。

そこで実際に釧路湿原をフィールドとした学習を実践している8つの小学校と中学校の事例を紹介すると同時に、その学習を支援することのできる地域のさまざまな活動施設の連携の事例も紹介することで少しでも困難な状況を改善し、学習の実現を可能にすることができる案内を作る必要がある、と考えました。

現在、環境教育の必要性、とくに子どもたちが住む地域の自然についての環境教育の大切さが語られています。それもただ単に自然についての知識を深めるのではなく、自然への子どもたちの感性を育てることが本当はとても大切なことだ、と思います。

かつて哲学者の中村雄二郎氏は「科学技術の無計画なあるいは非社会的な使い方による自然環境の破壊と平行して、われわれのうちなる自然である感性や情念も荒廃にさらされている。感性や情念はわれわれのもっとも身近なエレメント、つまり生存の基盤である。だから、それが枯渇し、あるいは荒廃するとき、われわれは感情生活においてだけでなく、知的、理論的活動においても衰退するばかりではない。」と語りました。（『感性の覚醒』）

釧路湿原という絶好の教材を使わない手はありません。そこで少しでもこのガイドブックを有効に活用していただくために、題名を「きづく わかる まもる 釧路湿原 - 学校と地域をつなぐ環境教育ガイドブック - 」としました。この実践事例を参考に、地域の自然である釧路湿原をフィールドとする学習の試みが少しでも前進することを願っています。

## ガイドブックの収録情報・活用方法

第1章では、学校への聞き取り調査をはじめとして本ガイドブックの作成にあたり多大なるご協力をいただいた、北海道教育大学釧路校環境教育第一研究室で教鞭をとっておられる大森享准教授に、2007年度に実施したアンケート調査及び学校への聞き取り調査を元に釧路湿原流域における環境教育の実施状況に関して概説いただきました。

第2章では、小学校6校、中学校2校にご協力いただき、総合的な学習の時間を中心として展開された詳細な活動内容を掲載しました。単元の概要やねらい、年間指導計画等の基本的な情報の他、いくつかの時間については詳細な授業の流れや生徒の反応、事前準備、単元を通じた成果や子どもの変容、担当教師からのコメントなど、紹介事例を参考に実際の授業の中で活用していただくにあたって有用となる様々な情報を掲載しました。

また、各事例の最後には、紹介事例中に登場する施設や団体等の情報について、ガイドブック内における掲載ページを記載しています。

う事により体験的で実感の伴った活動を展開するとともに、湿原の大切さや問題点などにもふれ、地域の自然の素晴らしさについても考えさせていきたい。」

上の二つを意識して、湿原学習を行ってきた。実際に、自分の目や耳、体全体で湿原を感じることで、釧路湿原に興味を持った子は多かった。夏休みの自由研究の課題でも、釧路湿原をテーマにした自由研究も多く見られた。何より、とても身近であるにも関わらずあまり知らなかった釧路湿原のことを、実際

望、また子ども達の願いもあり、2008年度(4年生)も湿原学習を継続している。2008年度は、クラスを3つのグループに分け、それぞれが興味のあるものを見たり、感じたりすることができるようにしている。また、2007年度(3年生時)、1匹しか釣れなかったザリガニ釣り体験をし、ほとんどの子が釣ることができた。学級行事では、ホタル観賞をするなど、釧路湿原にふれる機会を今年度も持っていることに感謝感謝である。



### ◎ 環境教育ワーキンググループ事務局より補足情報

第3章に掲載している以下の施設情報もご参照ください。  
鶴居村ふるさと情報館「みなくる」：98P、温根内ビジターセンター：105P、釧路市立博物館：113P

第3章では10施設、16の団体・企業・行政機関等に情報提供をいただき、所在地、連絡先や活動概要等の基本的な情報のほか、学校への協力可能な条件や実施までの流れ等を詳細に掲載しました。学校との連携事例や提供可能なプログラム例などの情報と合わせて、施設や団体等と連携して授業を展開していく参考情報としてご活用ください。

資料編では、釧路湿原の保全・再生を行っていくための基本的な枠組みの情報として、「釧路湿原自然再生全体構想の概要版」と、釧路湿原流域における環境教育及び湿原を題材とした教育の実施状況、課題、制約要因などを調査した「湿原を題材とした教育の実施状況に関する調査報告〈概要版〉」を収録しています。いずれの資料も全文の入手方法を掲載しています。